

# チェコ・ポーランドの産業遺産・ミュージアムとツーリズム

著者名(日)	根本 敏行
雑誌名	静岡文化芸術大学研究紀要
巻	14
ページ	101-110
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1132/00000971/">http://id.nii.ac.jp/1132/00000971/</a>



# チェコ・ポーランドの産業遺産・ミュージアムとツーリズム

## Industrial Heritage, Museum and Tourism in Poland and Czech

根本 敏行

文化政策学部文化政策学科

Toshiyuki NEMOTO

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は、近年世界的に関心が高まってきている産業遺産の活用による地域活性化やツーリズムとの連携と、戦争や民族紛争、労働問題といったいわば近代化の「負の」歴史遺産をミュージアムに取り入れ、これも地域活性化やツーリズムと連携させようとする取り組みの事例を取り上げ、広義の文化政策の視点から分析しようというものである。今回は旧東欧地域からポーランドとチェコの新しい事例を取り上げた。

This paper picked up some cases of urban redevelopment projects using industrial heritage in modern age in Poland and Czech Republic, and made investigations from a viewpoint of cultural policy. These cases sometimes include negative or political aspects of modern industrialization such as war, ethnic conflict, and labour issues. The important lessons drawn from these case studies are clever or subtle combinations of negative heritages with museums and tourism.

### 1. 研究の背景と近年の状況

政府は、2013年現在、富士山に続いて次にユネスコに推薦する世界遺産として、炭鉱や製鉄所、港湾などの全国の近代化産業遺産を取り上げることとした。また、世界的にも2000年頃から欧州を中心に多くの近代産業遺産で世界遺産に登録される件数が増加している。欧州の多くの重工業地帯（石炭と鉄鋼業の集積が多い）は、かつての工業生産の役割を終えて廃墟同然に放置されてきたが、近年になって俄かに脚光を浴びつつある。

代表的な例として、欧州随一の重工業地帯であったドイツのルール工業地域は、既に多くの近代産業遺産が世界遺産として登録されており、これらを活かした「ルール産業遺産回廊」を設定し、観光や生涯学習、文化活動、レジャー・レクリエーションなどを複合した地域政策を展開している。そして2010年には「ルール2010」というテーマのもと、エッセン市を中心としてドルトムントやデュイスブルク等を含む連担した広域都市圏が、単独の都市ではなく連担した都市圏として初めて欧州文化首都として選ばれ、1年間にわたって各種の文化イベントを繰り上げた。このルール工業地域をはじめ、これまで文化や観光とは無縁と思われてきた近代産業遺産は、その独特の景観や産業革命を担ったという独自の歴史的発展の経緯を生かし、新しい役割を担うことが期待されている。その分野は新たな産業の受け皿、住宅開発、各種文化活動など多岐にわたるが、とりわけ文化や観光との結びつきを強めており、新たな地域活性化の起爆剤として位置付けられている。

一方、重化学工業を牽引力とした近代化のプロセスは、また帝国主義的な世界戦争の時代とも重なっており、否応なしに影の部分を含み持っている。すなわち、産業構造自身が内包していた植民地経営による資源の収奪、奴隷貿易を含む欧州に有利な非対称の世界貿易、工場労働者の搾取や女性・若年・外国人労働者の虐待、強固で偏狭な民族主義・国粋主義の台頭と異民族の排除と虐殺、

大量虐殺に加担する兵器等の製造などである。その中には空想的社会主義者とも呼ばれた博愛主義的な企業家もあり、殺伐とした近代工業の支配する時代にあって私財を投じて労働者福祉を充実させた企業町を建設するなど、輝きを放っている面もある。

第2次世界大戦の終結を機に、多くの欧州諸国は、当初西側諸国を中心に緩やかな国家連合を形成し、少なくとも欧州内においては、ほぼ平和裏に豊かでリベラルな社会を築いてきた。しかし、科学的社会主義のもとで「労働者の国として」建国されたはずのソ連を盟主とする東欧諸国においては、第2次大戦後の冷戦時代にも形を変えた人権抑圧や労働者の搾取、民族差別、粛清という名の政敵の虐殺が継続していた。その後、ベルリンの壁崩壊に象徴されるソ連・東欧の民主化を経て、西側の文化や経済が東欧諸国に流れ込み、今日では急速な西欧化が進展している。

こうした変化の中で、欧州では近代の戦争の惨禍やそれに伴う民族差別や虐殺といった負の遺産についても、他の輝かしい進歩や繁栄のシンボルと同じように、時にはそれらをしのぐ規模と配慮のもとで、ミュージアムのコンテンツ、あるいはミュージアム本体として修復・保存・研究・教育の対象として位置付ける政策が目立つようになってきた。戦勝国も敗戦国も、また侵略から解放された国々もともに、人類の犯した罪を正面から受け止め、これを繰り返さないために真摯にこれと向き合い、次の世代に引き継いでいくという営みが活発化している。その背景には、戦後70年を経て、その生々しさが薄れてきたということもあるだろう。

我が国では広島原爆ドームが世界遺産に登録されている（1996）が、欧州でもアウシュヴィッツ＝ビルケナウの強制収容所（ポーランド）をはじめ、多くの負の遺産が世界遺産に登録されたり、ミュージアムとして整備されている。そして東欧諸国においては、冷戦時代の共産主義の遺産もまた抑圧的な負の遺産として位置付けられ、ミュージアムの重要なコンテンツとなっている。

そして、これら近代産業遺産や「負の遺産」を取り入れたミュージアムを、新たな地域活性化やツーリズムと連携させようとする取り組みが広がってきている。歴史の陰の部分にツーリズムという明るい光を投げかけようとするとき、時には不謹慎な観光客が鬱鬱を買うような行為に出たり、必ずしも和解に合意していない政権や反対者からの意見で攻撃されたり、冷徹な歴史の証拠を金儲けに結びつけるのかと批判されるといった軋轢もある。

本論では、異論についても慎重にこれを尊重しつつも、近年の新しい事例を意欲的な取り組みとして前向きに取り上げ、地域文化政策の視点から分析しようというものである。本論は、東欧の新しい動向をいち早く紹介するとともに、関連分野にいくつかの研究の切り口を提示することとし、詳しい分析はこれに続いて発表する論考に譲ることとする。

## 2. 東欧雑感

今回、筆者にとっては初めてのポーランドと、冷戦時代以来約 30 年ぶりのチェコ訪問となった。また、通常の観光ガイドには載っていないような、近代の産業遺産や負の遺産が残る地域への訪問となり、現地での移動はローカルな鉄道を主体とした。具体的にはポーランドのウッチ<sup>1)</sup>、クラクフ、アウシュヴィッツ<sup>2)</sup>、チェコのオストラヴァ、ブローヴァなどである。

鉄道を利用して直感的にわかることは、東欧、特にポーランドの鉄道網のインフラの整備が全く遅れているということである。日本の特急ならば 1 時間くらいの距離であっても現地の特急では 3 時間も 4 時間もかかる。最高速度が遅いだけではなく、途中で何度も徐行したり停車したりを繰り返すためである。

恐らく保線が行き届いていない、ダイヤの組み方が合理的ではない、車両や機関車が老朽化している、などの原因が積み重なったのものと推察される<sup>3)</sup>。そして何よりも、利用者が少なく、運賃も安いまま据え置かれ、積極的な追加社会資本投資がなされていないように見受けられる。駅舎や駅の設備も多くの駅で老朽化したままであった。国際空港がどこも新築でピカピカであったのとは対照的である。

西欧では、モータリゼーションの普及のあと高速鉄道の復権があり、1980 年代以降はドイツの ICE、フランスの TGV などの高速鉄道、英仏海峡トンネルの整備などの新たな社会資本投資が行われ、運営も合理的な民営化に向かったのとは対照的である。

冷戦後、急いで西側諸国に追いつくために、限られた財源を効率のよい社会資本に集中しなければならなかったに違いない。既に物流は鉄道からハイウェイにシフトした西欧に合わせ、そして新たに市民も自家用車が所有できるようになったことを受けて、ハイウェイの整備が優先されたことが見て取れる。

実際、各都市の駅周辺（かつて貨物ヤードなどがあった場所）や地方都市には巨大な駐車場の備わった大きなショッピングモールやスーパーが進出し、その店内の品揃えは西欧とほぼ同じ水準に達している。街中には世

界展開しているファストフード店や、驚くほど多くの寿司店が立地している。冷蔵トラックによるコールドチェーンや情報化した物流システムが東欧諸国の地方にまで展開できていることがわかる。

30 年前の冷戦時代に筆者が訪れたチェコでは、冬は生鮮野菜はほとんど皆無で、スーパーの中もあまり商品はなく、市民は厳寒の中に行列を作っていた。西欧ではその時代からすでにスーパーには生鮮食料品やブランド商品が溢れていた。

世界共通のブランド商品が目白押しの巨大ショッピングモールでは、一方で経済バブルの印象も受けた。日本の実感からすると 1 / 2 くらいに思える、全般的に物価の安い東欧にあって、高級ブランド品の価格は西欧と変わらない国際水準にあった。オストラヴァの炭鉱跡地の再開発では、モールの隣の再開発ビル（オフィスビル）はテナントが埋まらないまま放置されていた。また、モールと道路一本隔てた旧市街では、ソ連時代の老朽化したビルがそのまま残り、西欧や日米の高級車が多く走る中、自家用車を買えない収入レベルの市民が路面電車とトロリーバスを頼りにし、単価の安い商品売るスーパーに集まっている。

若くて豊かで教育の行き届いた世代は英語を使うが、ある年齢以上の人々は自国語以外ではロシア語とドイツ語を使い、インターネットも使いにくいであろう。

これらの表層的な観察から推測されることは、東欧の冷戦後の社会の発展がかなり歪んだものとなっている可能性である。

船と運河の時代、鉄道の時代、ハイウェイの時代、ジェット機の時代と社会資本を積み重ねてきた西欧諸国と異なり、こうした厚い社会資本の蓄積のない途上国や新興国では、限られた社会資本をハイウェイと空港に集中投資し、一気に西欧社会に追いつこうとした。その結果、時代の先端を行く、一握りのある特定の産業分野（IT 産業やソフトウェア産業など）だけが急速に発展し、国際水準の高い付加価値を生み、高額な給与を出すようになる。一方、従来からの産業分野は非効率で低付加価値のまま取り残され、多くの市民が失業したり低い所得水準に据え置かれ、貧富の格差が急速に拡大する。一部の高額所得階層は、高級車を乗り回し、高級ショッピングモールで高額商品を買ひ、ジェット機で長距離移動し、インターネットで海外資産を運用するようになる。旧都心では鉄道インフラの整備の遅れが大渋滞を引き起こし、大気汚染が深刻化する。都市の上下水や電力、電話線などのインフラも、途上国・新興国ではそもそも普及していないし、東欧では老朽化したままである。ネットとジェットと英語と自家用車を使いこなせる少数のエリートは先進諸国と遜色ない生活を謳歌できる一方、その他の大多数の国民は不便で貧弱で不健康な生活を強いられることになる。

途上国や新興国だけではなく、モバイル通信機器で急成長した韓国やフィンランド、アイルランドなどでも同様の傾向が見られる。アメリカは先進国であるにもかかわらず、国内にこの構図を持っている。

すなわち、限られた財源をどのような優先順位で社会資本に投じるかという政策判断は、単に交通インフラの



違いやその国の産業構造の違いのレベルにとどまらず、結果的に貧富の格差の拡大という国民の福祉政策にも影響を及ぼすということである。これが図らずも冷戦後の東欧地域に再現されているものと見られる。

### 3. ワルシャワ

ポーランドの首都ワルシャワは、世界遺産である旧都心の歴史地区を除き、古都クラクフとは異なる近代的な大都市である。しかもその近代化はソ連の影響下、中でも強権的なスターリンの時代に進んだため、典型的なソ連型の新市街地が形成されていた。

すなわち、スターリン様式と呼ばれる威圧的な擬古典趣味でシンボリックな文化科学宮殿（写真1）が市街地を睥睨し、不必要に広い幅員の道路と広場が幾何学的な街区を形成し、判で押したように同じ形の独立高層アパート棟がオープンスペースを挟んで平行に整列して市街地を埋めている。この、1階に商店が入って2階以上が集合住宅になった鉄筋コンクリートのアパート群は、ル・コルビュジェが提唱してフランスでは流行らず、ソ連や東欧、ブラジルなどの新都市、そして日本で普及したスタイルで、日本ではいわゆる公団住宅団地でおなじみの景観である。街区の周囲に連続して口の字型に建物を建て、中庭をあけるのが普通の欧州にあっては非常に珍しい都市景観となる。欧州ではモスクワ・スタイルと呼ばれ、日本では「豆腐に目鼻」的造形と揶揄されることもある。

今日、西側の資本が入って都市の再開発が急ピッチで進んでおり、至る所工事中である。特に文化科学宮殿とワルシャワ中央駅の周辺は、シンガポール、上海やドバイと見まがうような斬新なデザインの高層ビルが林立し（写真2）、ガラス張りの巨大なドームのショッピングモールや、世界共通のデザインでアメリカの砂漠の中にあったら似合いそうなハードロックカフェのポップでキッチュな店舗などで埋め尽くされつつある。

冷戦終了後、抑圧の象徴のような文化科学宮殿は取り壊してしまえという意見も多かったが、貴重な歴史・文化遺産として、そして今でも多くの観光客を呼ぶことのできる観光資源として残してはいる。が、その威圧的なスターリン様式の宮殿を、さらに背の高いガラス張りの高層ビル群が押しつぶさばかりの威圧感で取り囲んでいる様子からは、ソ連時代に対する強烈な不快感と、一抹のノスタルジーが同居したワルシャワ市民の屈折した思いが伝わってくるようである。これも負の近代化遺産と呼んでもよいものであろう。

さらに、高層ビルの足元に目を転じると、半ば廃墟化したユダヤ人ゲットーの跡も保存されている。ポーランドでユダヤ人というと、ナチスによる大量殺戮や、映画「シンドラーのリスト」が想起されることが多いだろう。しかし、東欧圏のユダヤ人は、第2次大戦前後だけではなく、ユダヤ系市民としての1000年以上の定住の歴史がある。宗教的にはローマ・カトリックが主流のポーランドにおいて、宗教的にも文化的にも非主流であったユダヤ人は、ナチス以前からも幾多の迫害に晒されてきた歴史があるが、それなりに良き隣人として暮らしてい

た人々も多かった。

これがナチス時代にはゲットーに隔離され、財産を奪われ、さらに強制連行されて労働に駆り出され、最後は強制収容所で大量殺戮の犠牲となった。そして、独ソによる国土分割に続き、ドイツ敗戦後ソ連赤軍が進駐した冷戦時代には、米ソ両大国の政治的軋轢（イスラエルを支持するアメリカと、反イスラエルのアラブ陣営を支持するソ連）の中で、新たな社会的疎外に置かれることとなる。

世界遺産の歴史地区、ユダヤ人ゲットーという異文化排除の負の遺産、威圧的なスターリン様式の負の遺産、没個性の単調なデザインのアパート群、そしてそれらをさらに威圧するような現代建築の群れ、こうした文化の重層的な否定と和解の連鎖が、今日のワルシャワの都市景観を形作っている。

文化科学宮殿から少し離れた場所に国立博物館と軍事博物館が並んでいる。国立博物館には、古代から現代までのポーランドの美術品、装飾品などが中心に展示されており、オーソドックスな内容である。興味深いのは隣の軍事博物館で、展示スペース全体の1/3近くを裂いて「カティンの森虐殺事件」の展示を行っている。入口から館内に続く展示の主要部分は古代ローマから中世、近世に至るこの地域の武器や甲冑の展示で、さらにポーランドが長い間周辺からの侵略に晒されてきた歴史、そしてナチスによる過酷な占領の様子が続く。博物館の前庭には冷戦時代のソ連製兵器、ミグ戦闘機や爆撃機、ヘリコプター、戦車などが多数展示しており、子供たちの格好の遊び道具になっている。恐らく冷戦時代にはポーランドを武力で「解放」したソ連軍の活躍を称揚する展示内容となっていたことが推測される。が、NATO陣営に属している今日では第二次大戦のアメリカ軍や一部日本も含む国際的な戦争に関わる展示内容が追加され、ソ連製の武器は逆に敵国から鹵獲した戦利品のようにも見える。そして近年になってカティンの森の展示が追加された。

カティンの森事件は、独ソ両国の占領下に置かれていたポーランドで、ポーランド国軍の将校約1万人を含む多くの兵士と民間人が行方不明となり、スモレンスク郊外のカティンの森で虐殺されたとの噂が流れたことに端を発する。当初虐殺の事実ドイツ軍によって発見されるが、ソ連はこれをナチスの仕業であるとするデマを流す。ソ連軍による虐殺を匂わせる断片的な情報はあったものの、冷戦終了まで真相は究明されなかった。ソ連崩壊後、ロシア政府も自ら調査を行い、虐殺がドイツではなくソ連の仕業であったことが確認されているが、その後ロシア政府はこれを「スターリンの犯罪」として政府の関与を否定し、態度を硬化させて調査を打ち切っている。本当の理由は、ソ連占領下のポーランドで反政府活動を封じるため、あらかじめ優秀なポーランド軍将校を大量に葬り去ったのだと考えられている。2010年にはポーランド主催の追悼式典に参加するためにレフ・カチンスキ大統領が乗っていたポーランド政府専用機がスモレンスク空港付近に墜落し、大統領はじめ政府高官が多数死亡した。翌年には墜落事件の追悼碑の碑文がロシア側によって改竄されるなど、冷戦後もロシアによる

不穏な動きが物議を醸している。

ナチスによる悪夢のような占領政策とともに、ソ連からも残虐な仕打ちを受けたポーランド国民は大きなショックを受けたことと推測されるが、軍事博物館のカティンの森の展示は、非常に感情を抑えた理性的でアーティスティックなものであった。ほとんど真っ暗闇に近い展示室には、発掘された将校たちの遺品や当時の映像がアート作品のように展示され、天井から下がる壁一面の薄い布には犠牲者の名前が墓碑銘のようにプロジェクターで映し出され、ごくゆっくりとしたスピードでスクロールしていく。近くにはディスプレイ端末がグレーの光を放っているが、これはタッチパネルで犠牲者の名前を検索すると壁面のリストからその人物名がハイライトされる仕組みである。饒舌な解説やプロパガンダは一切ない。墓地のような静謐な沈黙が支配する哲学的な空間であった。

#### 4. ウッチ

人口約 75 万人、ポーランドではワルシャワ、クラクフに続く第 3 の都市で、東欧でも有数の工業都市であったウッチは、ツーリズムの領域ではほとんど知られていなかった。

しかし、およそ 30 ヘクタールにも及ぶ広大な複合綿製品一貫製造工場跡地が、巨大ショッピングモールやホテル、レストラン、シネコンプレックスやミュージアム（ウッチ市歴史博物館、織物産業の歴史等を紹介する工場博物館、モダンアートの美術館「ms2」の 3 館）の集積する複合再開発地区「マヌファクトゥーラ」として蘇り、国内外から集客するようになり、衰退した第 2 次産業の町から新しい第 3 次産業の町に転換した成功例として、俄かに脚光を浴びている。（写真 3、4）同様の大規模開発は東欧各地に展開されつつあるが、もとの工場の建物等の残存状態が良好で、古いテクスチャーを活かして上手に再利用された事例としては他を圧する高品質な雰囲気を作り出している点で抜きん出た事例と言える。

ウッチは、18 世紀末までは小さな田舎町に過ぎなかった。その後、ドイツ人やロシア人の入植、産業立地を経て、一時は欧州有数の繊維・織物産業の拠点都市として繁栄した。

転機は 1815 年、ウッチがロシア統治下のポーランド王国領となった時に訪れた。1821 年、慎重な検討を経てロシアはウッチを工業地域として開発する方針をたて、ドイツやロシアの外部資本を導入し、織物工業や紡績工業を集積させていった。

田舎町に過ぎなかったウッチが急速に発展できたのは、ウッチがポーランド王国直轄領で新たな開発に必要な土地の配分が容易であったこと、勾配のある小河川が多く産業革命初期の動力源である水車動力の確保ができたこと、建築資材や燃料となる木材資源が豊富であったこと、安価な労働力が豊富にあったことなどが背景にある。改革開放後の中国の経済特区を連想させる。

製品はロシアや中国の旺盛な消費がこれを吸収し、ウッチの隆盛を支えた。1823 年から 1873 年までに

人口は 10 年ごとに倍増し、1870 年から 1890 年の 20 年間で経済成長は最盛期を迎え、クラクフを抜いてポーランド第 2 の都市に成長した。工業生産力では宗主国ロシアのモスクワを脅かすほどになっていた。

当時のウッチの新興工業都市としての様子は、ポーランドの作家ヴワディスワフ・レイモントの小説「約束の土地」（1899）や、これをもとに、ウッチ出身の映画監督アンジェイ・ヴァイダが制作した映画「約束の土地」（1974）の中に活写されている。他国からのいわば流れ者たちが、小さな家族経営の事業からスタートして大規模な工場経営に乗り出して成功するという、まさにアメリカン・ドリームのような広大なフロンティアが開いていた時代の状況をタイトルが表している。作品では、3 人の野心的な若者、ドイツ人企業家、ユダヤ人投資家、資本も何も持っていないが家柄と土地だけは持っているポーランド人の郷土の 3 人が主人公で、当時のウッチの民族的状況を象徴的に表している。映画のロケ地として、現在マヌファクトゥーラとなっている工場や企業家ポズナンスキの豪華な邸宅が使われているが、工場が 1970 年代にもまだ旧来の設備のまま操業中であったことに驚かされる。

冷戦時代の東欧諸国は、西欧が大きく産業技術を発展させてきた間、壁の向こう側でワルシャワ条約機構のもと独自の経済ブロック「コメコン」を形成し、石炭に頼った旧来型の産業構造を維持していた。この老朽化した社会資本の蓄積が、鉄道網の状況に表れているように、冷戦終了後に東欧諸国で現代的なバランスのとれた経済発展を阻害した要因となる。が、その反面、古い工場などが貴重な近代産業遺産として旧来の姿のまま残存したことにより、映画のロケや今日の再開発など、産業遺産を活用した新たな文化産業や都市開発の手掛かりとなったことは皮肉なことである。

工業化は最初ドイツ人がリードしたが、やがてポーランド人やユダヤ人（ユダヤ系東欧人）も企業家として参入した。最初の近代的な工場はドイツ人ルードヴィッヒ・ガイヤーによって 1837 年に開設され、そのわずか 2 年後にはポーランド王国で最初の蒸気機関が導入された。1955 年には新たに参入したルードヴィッヒ・グローマンやカロール・シャイブラーといった意欲的な企業家達が次々と新たな工場を建設した。

一方、1835 年には、生まれたばかりの幼子を伴ったユダヤ人カルマン・ポズナンスキがウッチにやって来て雑貨商を始め、綿織物業にも進出。その子イズラエル・ポズナンスキ（1834～1900）は父の遺志を継いで繊維工業の競争の表舞台に踊り出た。1872 年の自動織機の工場から始まり、その後 25 年間、紡績から染色など川上から川下までをカバーする綿製品の一貫製造の可能な一大工場コンプレックスを完成させる。収益の中から何千人もの労働者のための住宅や病院を整備し、自身の大邸宅や子供たちの邸宅、シナゴグなどを次々と建設し、ウッチと言われるほどの莫大な資産を築いた。同時代の西欧では、イギリスで労働者のユートピア「ニュー・ラナーク」を建設したロバート・オーウェンをはじめ、多くの理想主義的企業家が工場都市を建設していたが、ポズナンスキもそれほどではないにし



ても私財を投じて質の高い労働者のコミュニティを作ったという点で共通点がある。自身の大邸宅も工場の隣に建設し、この工場群と邸宅が今日のマヌファクトゥーラとなっている。贅を尽くした邸宅は、ウッチ市の博物館となり、ウッチ出身の著名なピアニスト、アルトゥーロ・ルービンシュタインの遺品を集めた特別展示や、ポーランドの近代絵画のコレクションを集めた展示も充実している。工場群は、第2次大戦のナチス占領時代を除いて1997年の閉鎖まで工場として稼働していた。ソ連崩壊後の東欧の開発ブームの中で、1999年、フランスの不動産開発会社「アプシス」がこれを入手して開発に乗り出し、入念な調査と準備を経て2001年にマヌファクトゥーラとして再生し、今日に至っている。

ポズナンスキは、ユダヤ人でありながらウッチの工業界のトップに君臨するまで上り詰めた稀有な人材で、ポズナンスキー族の足跡を追うだけでも大変興味深い、本論では深くは立ち入らないこととする。

ウッチには、先に触れた映画監督アンジェイ・ヴァイダをはじめ、ロマン・ポランスキーやクシュシュトフ・ケシトフスキらを輩出した映画大学がある。また多様な民族や宗派が混在し、多様な様式の建物や宗教施設、多様なコミュニティが共存していることは、ウッチに独特な文化的雰囲気を出している。こうした多文化の共生する環境の中で、マヌファクトゥーラだけではなくルードヴィヒ・ガイヤーの工場群を改築した織物博物館（写真5）でも新しい試みを展開している。同博物館は、もと織物工場であった建物を使い、基本的に旧態依然とした古い織機などを並べただけのものであったものが、オーディオ・ビジュアルを駆使した新たな展示内容を充実、隣接して伝統的な木造住宅に伝統工芸の工房を設けた野外博物館が追加され、さらに筆者らが訪問した時には織物を題材にした現代アートの「トリエンナーレ」の会場にもなっていた。動くジェニー紡績機の機械部品にマイクロカメラを設置して撮影されたビジュアルは、他の世界中の博物館の展示には見られないユニークなもので、特に筆者の印象に残っている。映画大学を擁する都市ならではの演出ではないだろうか。織物工業自体は現在ほとんど残っていないが、都市の近代産業の歴史を貴重な地域資源としてとらえ、織物産業が繁栄していたという歴史的な特徴を今日の都市整備に生かしているとみることができる。

第2次大戦時、ナチスによって占領されたウッチにはユダヤ人ゲットー（ウッチ・ゲットー）が建設され30万人以上のユダヤ人が市内から強制的に移住させられた。併せてジブシーなど非ユダヤ人の強制収容所や絶滅収容所がいくつか郊外に建設された。終戦までにポーランド人約12万人、ユダヤ人約30万人など、あわせて42万人以上の住民が犠牲となった。なお、ドイツ占領時に第3帝国国民となることを拒否したドイツ系市民は追放され、終戦時にもソ連軍の侵攻を恐れて大半のドイツ人がウッチから避難したため、今日ドイツ系住民の数は減っている。

郊外のユダヤ人墓地のさらに先にある旧ユダヤ人ゲットー跡（ラドゴスツ）は、その廃墟跡が負の遺産として保存され、犠牲者を追悼し、過去を反省するためのミュー

ジウムとなっている。

## 5. その他

### (1) クラクフ

ポーランドの古都クラクフは、11世紀中葉から1596年までの約550年間ポーランド王国の首都であった。その中でもヤギェウォ王朝（1386～1572）の時代は、ボヘミアのプラハ、オーストリアのウィーンと並び欧州文化の中心都市のひとつとして隆盛を誇った。

観光の目玉はヴァヴェル城や世界遺産（1978）の旧市街、コペルニクスやヨハネパウロ2世も学んだ中東欧最古の大学の一つヤギェウォ大学などだが、世界遺産「ヴィエリチカとボフニアの王立岩塩坑群」（1978年、2013年拡大）や、世界遺産（1979）「アウシュヴィッツ・ビルケナウ - ドイツ・ナチスの強制・絶滅収容所（1940年 - 1945年）」などを訪れるための拠点都市でもある。

さらに、旧市街に隣接して欧州でも最大級のユダヤ系市民コミュニティであるカジミエシュ地区がある。ここには映画「シンドラーのリスト」の舞台となり、ロケ地として使われた実在するシンドラーの珐瑯工場があり、2010年6月には「クラクフ歴史博物館」としてオープンした。展示内容は、ユダヤ人ゲットーの様子をはじめ、ナチス占領時代のクラクフ市内の様子をジオラマや映像を駆使してリアルに再現したもので、写真や文書、遺品の数々が系統的に展示されており、アーカイヴや図書館も併設され、見ごたえのある内容となっている。展示の最後は真っ白な小部屋で、犠牲者の名前がびっしりと書かれた白い円柱がゆっくりと回っているだけである。軍事博物館のカティンの森の展示もそうであったが、こうしたあまりにも重たい負の遺産の展示の締めくくりは、決して饒舌ではなく、白や黒のモノトーンのアートスティックなデザインで沈黙が支配する鎮魂と省察の空間となっている。大ヒット映画の影響もあり、多くの訪問客が世界中から訪れている。他にもシンドラーゆかりの薬局店舗や、アーティストによるユダヤ人の悲劇的な歴史をテーマとする屋外インスタレーションなどが近所に点在しており、歩いて回る観光ルートにもなっている。有名なハリウッド映画の影響を受けて世界中の観光客がやってくるという事情は、同じく悲劇的な負の遺産を題材にしているタイタニック号の映画と北アイルランドのベルファスト造船所のミュージアムとの関係にも見られる。興味深いのはシンドラーの工場に隣接した工場地区に「クラクフ近代美術館」が建設されていることである。（写真6）負の遺産であるシンドラーの工場と合わせて、カジミエシュ地区の観光資源として、芸術文化の施設が位置付けられており、地元パンフレットでは双方を合わせて訪れるように推薦している。

カジミエシュ地区自体は、第二次大戦前後に多くの住民が転出、あるいは強制連行されて荒廃していたが、近年ではシナゴークなどの残る独特の雰囲気を生かしてカフェやレストラン、個性的なショップが増え、クラクフでも最新の観光スポットとして脚光を浴びている。また、

ソ連崩壊後の1900から毎年続く「ユダヤ文化フェスティバル」の会場にもなっており、音楽、演劇、映画などが繰り広げられ、飲食店なども大いに賑わう。

戦争やユダヤ人迫害など、重い負の遺産を多く抱えるクラクフではあるが、軍事博物館のカティンの森の展示や、シンドラーの工場と隣接する「クラクフ近代美術館」など、アート・シーンと負の遺産とが連携している例が見られる。後述するアウシュヴィッツの収容所でも、犠牲者の遺品が山と積まれた展示は、モダンアートのインスタレーションのようにも見える。(写真8)

アートとの連携は、負の遺産をも組み込んだ、新しいツーリズムの潮流と見ることもできるかもしれないが、重く辛い歴史と対峙せざるを得ない時に、訪問者が自身の内面と向き合い、過去と和解するための舞台装置として、一見抽象的でエキセントリックでもあるモダンアートの役割が期待されているのではないだろうか。

## (2) アウシュヴィッツとビルケナウ

世界遺産にもなっている「アウシュヴィッツ・ビルケナウ - ドイツ・ナチスの強制・絶滅収容所(1940年-1945年)」については、改めて解説の必要がないほど世界に知られている。本論でも改めてその内容を記述することはしない。(写真7)

訪問時の着目点として、次の3点を指摘したい。

1つは、人類にとって最大級の悲劇の現場という負の遺産でありながら、国際的な観光地として賑わっており、(写真9) 駐車場は大型の観光バスがひっきりなしに出入りし、ガイド付きのツアー(日本人ガイドもいる)ではツアーグループ同士のすれちがい建物内の通路を歩くのも難しいという状況であったこと。また、敷地内にいくつもあるギフトショップでは、日本語を含む各国語の大量のパンフレットや絵葉書、書籍、DVDなどが販売されており、一般の観光地の様子とほとんど変わらない。中には不謹慎にも笑いながら記念撮影をする観光客もあって周囲の輦蹙を買ったり、同じ団体が銃殺刑の刑場では集団でお祈りをささげたり、戸惑うくらい多様な人間の振る舞いが見られた。多くの人がこの悲劇の現場を体験することも重要であろうが、少し混雑が過ぎるようである。

2つめは、当日数百人はいたであろうイスラエルの高校生の修学旅行の団体である。(写真10) 全員が真っ白のジャージを着ており、背中には青い大きなユダヤの星のシンボルが描かれている。彼ら彼女らは、畳1枚分もあろうかという巨大なイスラエル国旗をいくつも掲げて、隊列を組んで収容所の中を闊歩していた。要所では車座になって引率の教員やガイドから説明を受けて神妙な顔をしているが、それ以外では全く屈託のない十代の青少年の笑顔が見られ、日本の高校生の修学旅行風景と同じようでもあった。どうやらイスラエルの国を挙げての愛国教育の一環のようである。イスラエル建国の大きな契機となった欧州のユダヤ人虐殺の聖地巡礼という趣である。

3つめが負の遺産とアートとの連携で、ユダヤ人の遺品であるカバンや靴、衣服や髪の毛、義手義足までもが大量に積み上げられた、現代アートのインスタレーショ

ンのような展示である。(写真8) そのほか、ユダヤ人虐殺をテーマにした現代アートの作品展示も展開されていた。鉄条網や独房、ガス室や火葬場など、殆どの施設が当時のままに修復・保存されている。しかし東アジアの某国のように、リアルなユダヤ人やナチス軍人のマネキン人形や、役者が扮装して当時を再現する演技、拷問、人体実験のシーンの再現などといった仕掛けは一切ない。客観的な事実のみを淡々と並べる、非常に抑制の効いた理性的な展示である。ガイドの説明によると、訪問者は、やや抽象的ともいえる無言のインスタレーションと対峙することで、その背後にあるユダヤ人犠牲者たちに「思いを馳せる」ことにより、自身の内面とも向き合い、より心の深い部分での心象を体験することに主眼が置かれているということである。

## (4) オストラヴァ

ポーランド、チェコ国境付近は石炭を産出し、近代化の過程で炭鉱や製鉄所が多数立地した。この豊かな資源と工業立地は、常に周辺諸国の領土拡張欲を刺激し、度重なる侵略戦争と国土分割を引き起こす大きな原因となっていたものである。

オストラヴァは、チェコの西のはずれにある重工業都市で、チェコでも有数の産業・人口集積を誇ってきた。周囲には同様の工業都市が多数立地するが、オストラヴァはその拠点都市である。しかし観光ガイドブックの類には全く登場せず、ツーリズムからは縁遠い存在であった。

近年は、ドイツのルール工業地帯の再生などをお手本に、衰退しつつある炭鉱や製鉄所等の廃墟を再生し、新たな都市的活動の受け皿とする取り組みが進展している。

主要な炭鉱は博物館として再生される例が多い。(写真11) 炭鉱によっては、子供向けトロッコ列車を運転するなど、テーマパークのような演出がされ、多くの家族客等で賑わっていた。

当地を代表する工場であったヴィトコビチェ製鉄所(写真12)では、高炉の頂上まで登るガイドツアーが充実しており、巨大なガスタンクは多目的ホールに改造され、隣接する工場棟は青少年向けの科学館になっており、近代産業遺産の独特な雰囲気を生かした集客施設としての改装が進行中であった。屋外では様々なイベントが開催され、筆者達が訪問したときにはクラシックカーの展示イベントが行われていた。よく工夫された整備事例ではあるが、ルール地域のデュイスブルク製鉄所の取り組みを大いに参考にしている様子であった。

現地で「フクシマ」「フクシマ・リアクター」という言葉を耳にし、怪訝に思った。

観光パンフレットにも「フクシマ・リアクター」とあるが、廃坑となったカロリーナ炭鉱跡地の商業・業務複合開発地区「Forum Nová Karolina」の通称である(写真13)。地元ニュース「iDNES.cz」で「都心に原発が建設される」と紹介されたパロディ記事がきっかけで、白い巨大な立方体が並ぶ様子が福島原発に酷似していたためである。

ここが、本論冒頭で触れたバブルの気配が漂う開発事



例で、隣接するオフィス棟はまだ一つもテナントが入居していなかった。現在も開発は進行中で、隣接する鉄骨と煉瓦の古い工場建屋の改装工事が進んでいた。

ウッチのマヌファクトゥーラの高品質な再開発に比べ、フクシマは現状では何の個性も感じられないインターナショナルなモダンデザインのモールだけで、周辺から浮いた存在に感じられる。隣の旧工場跡の開発が完成しないとその全貌はわからないが、ウッチの事例と比べて、より魅力的な地区になるとは思えない出来栄であった。

いずれにしても、近代産業遺産の廃墟を新しい集客施設に転換して、ツーリズムにも結び付けようという試みではあるが、まだ冷戦後の経済体制変革の混乱が収束しきっておらず、西欧の先行事例を参考としながらいろいろと試行錯誤している段階と見ることができよう。

## (5) ポルーバ

オストラヴァの郊外には、冷戦時代に建設された衛星都市が点在する。母都市オストラヴァの重化学工業を支える労働者のベッドタウンであるが、郊外の農地を潰して全くゼロから建設されたニュータウンであり、歴史や地理的な文脈から切り離され、機能的かつ時の政治の状況を反映した人工的デザインで作られている。

その中でも規模が大きく、スターリン時代のソ連の様式を色濃くのこしているのがポルーバである。(写真14)

興味深いのは、その独特の町並みやスターリン様式の擬古典趣味の建物群が、今日では観光資源として位置付けられていることである。地元で無料配布されている若者向けの観光パンフレットでは、表面がオストラヴァで裏面がポルーバになっている。

ワルシャワの新市街地同様、不必要なまでに広幅員であくまでも直線に伸びるオーバースケールの街路、コルビュジェ・スタイル、あるいは日本の公団住宅スタイルとも言ってよい集合住宅の独立棟の連続、交差点や広場に面して左右対称に作られた建物群。それらのディテールには一見ギリシャ彫刻のような人物像やレリーフがふんだんにちりばめられているが、これらはもちろん神話の登場人物などではなく、工場労働者や技師、ピオネールの子供たちなどである。

観光パンフには冷戦時代の特徴ある建物を見て回る観光ルートや見どころが示されている。負の遺産が観光資源となっている好例である。しかし、外国人観光客や若い人々にとっては、スターリン様式などは歴史の中の珍しい景観要素であるが、見るだけでも不快と思っているある年齢以上の人々とのギャップが大きい。

## (6) プラハ

チェコの首都プラハは、都心の歴史地区が世界遺産(1992)に登録されている、魅力的な古都である。

プラハは、今回の調査では筆者にとっては帰国のための通過点に過ぎず、短時間の滞在であった。

30年前の冷戦時代と比べると、王宮やカレル橋などの観光スポットはあまり変わっていないが、ホテル、レストラン、商店が集まったヴァツラフ広場などは西側資

本の奔流が流入し、冷戦時代とは様変わりしていた。

特に印象に残っているのは「共産主義博物館」である。冷戦時代のチェコの様子を、数々の収蔵品で再現したものであるが、特別展示で北朝鮮の市民の虐待や全体主義の異様な光景を加えるなど、全体的に共産主義(とりわけソ連などの全体主義的・独裁的なそれ)に対して批判的な眼差しで買われている。

そもそも立地場所が繁華街のはずれのカジノの入居する建物の中で、博物館のシンボル・キャラクターもロシアの人形マトリョシカが牙を剥いているパロディである。(写真15)なお、欧州の都心でカジノという、金持ちがバカラやルーレットをする場所というより、ゲームセンターのようなものを指す場合が多い。

チェコにおけるソ連のプレゼンスが、いかに人権抑圧的で非人道的であったかがひしひしと伝わってくる。プラハの春に続くチェコ事件で、ソ連軍の戦車によって蹂躪された記憶が残り、隣近所の相互監視のスパイに密告されて秘密警察に捕まり、拷問などひどい目にあったり、政治犯・思想犯として収容所に監禁されたりしていた人々がまだ存命であり、生々しい記憶が残っている。

1989年のベルリンの壁崩壊、ソ連政府の崩壊後、東欧諸国では独裁政権が次々と倒れ、街中にあふれていたマルクス、レーニンやスターリンの像、共産主義を称揚するモニュメントや彫刻は次々と引き倒され、通りや広場の名前もソ連や共産主義を連想させるものは旧名称か別の名称に変更された。

冷戦時代の負の遺産は、見るのもおぞましい忌避の対象であるが、一方で「オスタルジー」と呼ばれるような東側体制への淡いノスタルジーの意識も残っている。冷戦後の急速な社会変革に追いつけない人や、貧富の格差拡大で貧困の底に落ちてしまい、貧しいながらも平等であった共産主義時代を懐かしむ人も少なからずいる。また、純粋に芸術的造形として、共産主義時代の作品にはそれなりに優れたものも多くある。

ワルシャワの文化科学宮殿もそうであるが、懐かしいけれども忘れない、屈折した気持ちがこうしたミュージアムによく表れている。

同様のものは、旧東ベルリン、ルーマニアのブカレストやハンガリーのブダペストにもある。

プラハには、王宮の近くに国立科学技術博物館がある。冷戦時代に作られた鉄筋コンクリートの近代的デザインの建物で、展示内容は、シュコダやタトラなどチェコ製のオートバイと自動車充実している以外はあまりぱっとしない。これでもかというほどのチェコ製オートバイの展示からは、かつて工業先進国であったチェコの矜持が垣間見える。むしろ興味深いのは、あまり入場者がいないのにやけにたくさん、各部屋ごとにいる学芸員(あるいは職員)の数の多さと、横柄でまるでやる気のなさそうなその姿である。話しかけてもめんどくさそうに「さあね」というような答えしか返ってこない。展示内容の古色蒼然としていた様子とも相俟って、この博物館の中だけは筆者が30年前の冷戦時代に訪れたチェコにタイムスリップしたかのようなのである。皮肉を込めて言えば、職員に注目すれば、ここは科学技術博物館というより人的資源の共産主義博物館と呼べるかもしれない。



最後の科学技術博物館は別としても、東欧諸国における共産主義は、ソ連による抑圧という負の遺産としてとらえられている一方、今では映画の中でしか見られない冷戦時代の様子がリアルに見られる貴重な観光資源にもなっていることがわかる。

以上、極めて雑駁に現地の状況を紹介したが、ここには近代の産業遺産、負の遺産とミュージアム、ツーリズムを結びつける多くのヒントが見出せる。筆者としては、ここに見られる一つ一つの関係性について、今後さらに調査研究を充実させ、順次論考として出すことを目指すものである。

なお、本研究の遂行にあたり、平成 24 年度静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費の助成を受けたことを付記する。



写真3 「マヌファクトゥーラ」正門付近



写真1 文化科学宮殿



写真4 「マヌファクトゥーラ」入口



写真2 ワルシャワ都心の高層ビル



写真5 ガイヤーの工場を改築した織物博物館





写真6 クラクフ近代美術館とシンドラーの工場



写真7 アウシュヴィッツ収容所入口



写真10 イスラエルの修学旅行生



写真8 ユダヤ人犠牲者の遺品



写真9 ビルケナウ収容所



写真11 オストラヴァのミハル炭鉱跡





写真 12 ヴィトコーピチェ製鉄所



写真 13 「フクシマ・リアクター」の中のショッピングモール



写真 14 ボルーバの町並み



写真 15 プラハの共産主義博物館

#### 注釈

- 1) ウッチ:ポーランド語の Łódź の日本語表記は、ウッチ、ウッジ、ウッチなどがあるが、本論では広く使われていることと、かつポーランド政府観光局の日本語表記にならってウッチとした。
- 2) アウシュヴィッツ: アウシュヴィッツはドイツ語の Auschwitz で、ポーランド語の地名オシフィエンチム Oświęcim のドイツ語表記に基づく。オシフィエンチムにナチスの第 1 強制収容所が作られたが、世界遺産として、あるいは一般的な認識としては、隣接するブジェジнка Brzezinka (ドイツ語名ビルケナウ Birkenau) の第 2 強制収容所とセットで取り扱われ、両者を代表する短縮名称としてアウシュヴィッツのみが用いられることもある。強制収容所の施設名称としては両者ともポーランド語の地名のドイツ語表記に基づく名称であるが、地名として用いるときはポーランド語、施設名としては当時のドイツ語が固有名詞として定着しており、ポーランド語でも施設名称としてはドイツ語呼称の方を使用している。
- 3) 事故や職員の不祥事が続いた 2013 年の J R 北海道の様子と同じような状況のように見える